

## 1-4-11. スモモ ‘カラリ’ の台木としての活用に関する予備的調査

香西直子

### Perliminary survey on the utilization of ‘Karari’ Japanese plum as rootstock

KOZAI Naoko

鹿児島大学学術研究院農水産獣医学域農学系

*Faculty of Agriculture, Kagoshima University*

#### 要旨

奄美大島で古くから栽培されるスモモ ‘カラリ’ は、低温要求量は極めて少ないと考えられている。鹿児島県はモモの栽培地域の南限であり、近年進行する温暖化対策として低温要求量の少ない品種の導入が注目されているが、台木の検討も求められている。本研究では、‘カラリ’ の台木としての活用について検討するため、挿し木実験をおこない、また ‘カラリ’ の苗木生産について現地で聞き取り調査を行った。発根促進剤を処理して緑枝挿しを行ったところ、無処理区を含むすべての処理区で全て枯死し、発根も確認できなかった。現地調査から、‘カラリ’ 在来系統の育苗は吸枝からの株分けに依存していることも明らかとなった。‘カラリ’ に関しては低温要求量も不明であり、台木用の ‘カラリ’ の苗木生産のみならず、‘カラリ’ そのものの苗木生産や栽培特性を解明するためには多くの課題があることが明らかとなった。

#### はじめに

奄美大島では ‘カラリ’ とよばれるスモモが古くから栽培されている。春季に発芽するには冬季に低温に遭遇する必要があるが、国内で栽培されるスモモの多くは低温要求量が多いが、奄美大島で栽培される ‘カラリ’ は、低温要求量が極めて少ないと考えられている。近年、気候変動に伴う温暖化により鹿児島県ではモモの発芽不良が生じている。鹿児島県に適した少低温要求性品種の導入が期待されるが、同時に台木の選抜も必要である。スモモはモモと接ぎ木親和性があることから、‘カラリ’ の台木利用の可能性が期待される。本課題では、スモモ ‘カラリ’ の台木利用の可能性を検討するため、2か年にわたり調査をおこなった。本報告では、台木獲得のために実施した緑枝挿し実験の結果と、‘カラリ’ の苗木生産に関する調査結果を報告する。

#### 方法

緑枝差しによる挿し木発根調査 鹿児島大学農学部附属農場唐湊果樹園に植栽されているスモモ ‘カラリ’ の成木を使用した。2021年8月5日に挿し木した。約10cmに調整した穂木について、以下の方法で前処理をした：1) インドール酪酸 (IBA) 100ppm で5秒間浸漬処理、2) IBA 20ppm で12時間浸漬処理、3) 無処理。各処理区に30～32本を挿し木して遮光したミストハウスで管理し、3ヶ月後に発根率を調査した。

苗木生産および生育に関する聞き取り調査 2020年10月14～15日、および2021年12月22～23日に鹿児島県農業初総合センター大島支場と奄美市大和村役場、生産者を訪問し、‘カラリ’ 苗木生産の方法に関する聞き取り調査をおこなった。

#### 結果および考察

**緑枝差しによる挿し木発根調査** 挿し木後、2021年11月中旬までに全ての個体が枯死した。掘り上げて調査したところ、いずれの処理区でも発根していなかった。IBAは発根促進剤として利用される薬剤だが、スモモ‘カラリ’の緑枝挿しには効果が認められなかった。今後は挿し木の時期や発根促進剤の処理方法について検討する必要がある。

**苗木生産および生育に関する聞き取り調査** ‘カラリ’の苗木育成について、近年選抜された「大玉系統」については接ぎ木苗が生産されているが、在来系統については通常、根から直接発生した吸枝(ひこばえ)の採取により得ている(図1)。母樹周辺に発生したひこばえは、十分な大きさになるまで1~2年間その場で育成される。成長した幼苗を冬季に根を切断して株分けし、鉢上げする。1本の母樹から獲得できる苗木は2~3本程度で、獲得効率は極めて低い。「大玉系統」については、接ぎ木苗は鹿児島県本土の種苗業者で生産される。接ぎ木のための穂木は毎年12月頃に大島から出荷され、‘おはつもも’台木に接ぎ木される。以上から、在来系統と「大玉系統」のいずれも苗木の生産効率は悪く、育苗方法の改善が必要であると思われる。また、台木には多低温要求性と思われる‘おはつもも’が使われており、‘おはつもも’台木の利用が‘カラリ’の生育に与える影響についても調査が必要である。

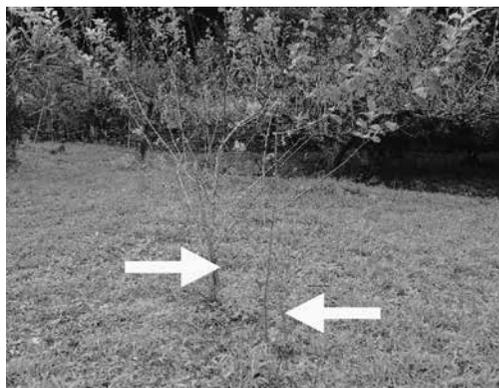


図1 ‘カラリ’在来系統の母樹(左側の矢印)と母樹の根から発生したひこばえ(右側の矢印)

現地調査より2020年は生産量がわずか2トンにとどまり、過去最低の低さであったことが分かった(図2)。この年は暖冬であり、生産現場では冬季の気温との関連が指摘されている。しかし‘カラリ’の低温要求量に関する情報は得られず、暖冬との関連は不明である。本研究課題は‘カラリ’を他のモモや近縁種の台木として活用する可能性について検討しようとするものであったが、まずは‘カラリ’そのものについて、低温要求量などの生育特性を調査する必要があると思われる。

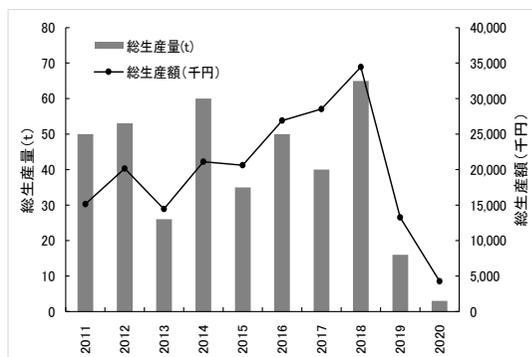


図2 スモモ‘カラリ’の総生産量と総生産額(2011年~2020年)。(大和村産業振興課報告書より作図)